

歴史人物を描いた文学作品 4

はじめに

「歴史人物を描いた文学作品」の第4回目は、江戸時代の歴史人物 39 人を描いた文学作品を紹介します。大久保彦左衛門から和宮まで、作家の目を通した歴史人物を歴史小説という形で再認識していただければと思います。なお、紹介した人物のうち大石内蔵助・吉良上野介・堀部安兵衛が関わった事件（忠臣蔵）を描いた文学作品も紹介しました。

なお、資料リストで紹介しました歴史小説は、その人物を描いた全作品を紹介している訳ではなく、当館で選択させていただいた作品です。

[資料リスト](#)

1. 大久保彦左衛門（おおくぼ ひこざえもん） 1560～1639（永禄3年～寛永16年）

江戸前期の旗本です。幼少から一族で徳川家康に仕え、多くの合戦で勇名をはせました。家康の関東入国後において 1000 石を知行しました。寛永 3 年(1632)頃自家の歴史・武功などを記した「三河物語」を著しました。

2. 春日局（かすがのつぼね） 1579～1643（天正7年～寛永20年）

徳川家光の乳母。明智光秀の家臣斎藤利三の娘です。慶長 9 年(1604)板倉勝重の推挙で家光の乳母となり、家光の弟忠長誕生後は家光の将軍継嗣に尽力しました。その後家光の信任を得て大奥で権勢を広げました。

3. 天草四郎・益田時貞（あまくさ しろう・ますだ ときさだ） 1621～1638（元和7年～寛永15年）

島原の乱の総大将です。小西行長の旧臣益田甚兵衛好次の子といわれます。寛永 14 年(1637) 庄政に抵抗して島原と天草に一揆が起り、一揆が合流すると総大将になり島原の原城に立て籠もりました。寛永 15 年(1638)2 月城が陥落し討ち取られました。

4. 松平信綱（まつだいら のぶつな） 1596～1662（慶長元～寛文2年）

江戸前期の大名。伊豆守、俗称知恵伊豆。寛永 10 年(1633)老中になり、寛永 15 年(1638) 島原の乱を鎮定し、のち川越城主となり 6 万石を領しました。家光の死後も 4 代将軍家綱に仕えて由比正雪の乱(1651)、明暦の大火(1657)などを処理し幕政の基礎を固めました。

5. 保科正之（ほしな まさゆき） 1611～1672（慶長16年～寛文12年）

徳川秀忠の 3 男で徳川家光の異母弟です。寛永 20 年(1643)会津藩 23 万石の大名になりました。幕藩体制成立期の名君で、家光の死後は遺言で家綱を補佐し、文治政治に幕政を転換していきました。

6. 由井正雪（ゆい しょうせつ） 1605～1651（慶長10年～慶安4年）

江戸前期の軍学者。駿河国油井の紺屋に生まれ、17 歳で江戸に出て楠不伝に軍学を学び、のち兵学の塾を開いて旗本や浪人に講じました。家光死後 3 か月の慶安 4 年(1651)7 月に浪人救済と称し自身は久能山と駿府城を奪取し、別働隊が江戸を襲うという反乱を企てましたが事前

に発覚したため自害しました。

7. 徳川光圀（とくがわ みつくに） 1628～1700（寛永5年～元禄13年）

徳川頼房の3男。明暦3年(1657)「大日本史」の編さんに取り掛り、生涯をこれに尽くしました。寛文元年(1661)水戸藩主となり、元禄3年(1690)に封を兄の子綱条に譲り西山に居を移しました。名君の誉れ高くのちに「水戸黄門漫遊記」が作られました。

8. 徳川綱吉（とくがわ つなよし） 1646～1709（正保3年～宝永6年）

江戸幕府5代将軍。3代将軍家光の4男。慶安4年(1651)館林15万石に封ぜられます。延宝8年(1680)家綱の養嗣子となり、同年8月将軍に就任します。初めは堀田正俊を大老に任じて文治主義をとりますが、貞享元年(1684)正俊死後は柳沢吉保に政治をゆだね、貞享4年(1687)には生類憐みの令を発して庶民はこれに苦しみ、綱吉を「犬公方」と呼んでいます。

9. 紀伊国屋文左衛門（きのくにや ぶんざえもん） 生没年不詳

江戸時代中期の豪商。江戸で材木商を営み、元禄11年(1698)上野寛永寺根本中堂の造営に際し、その用材の調達で巨利を得たといわれます。数々の豪遊逸話が伝わりますが、役人饗応か自己宣伝といわれます。宝永5年(1708)に大銭の鑄造を請負いましたが1年たらずで通用停止となり、大損失を出して材木屋も廃業して家運は急速に傾いたようです。

10. 柳沢吉保（やなぎさわ よしやす） 1658～1714（万治元年～正徳4年）

江戸中期の老中。幼少から綱吉の小姓を務め、綱吉が将軍になると側用人となり禄高は1万石になります。元禄7年(1694)に老中格となり川越藩7万石を領しました。同11年(1698)には老中上座（大老格）になり、宝永4年(1704)には甲府藩15万石となりました。荻生徂徠の登用など元禄期の政治を推進しました。

11. 吉良義央〔上野介〕（きら よしなか） 1641～1702（寛永18年～元禄15年）

江戸中期の高家。典礼に詳しく高家中の古参なため、公家を殿中に接待する際には権威があり、有職故実の指南には尊大な態度で臨んだといわれます。元禄14年(1701)勅使江戸下向の際、接待役の赤穂藩主浅野長矩に切り付けられました。元禄15年(1702)12月14日大石良雄ら赤穂四十七士の討入りで斬殺されました。

12. 大石良雄〔内蔵助〕（おおいし よしお） 1659～1703（万治2年～元禄16年）

赤穂四十七士の首領。赤穂藩の家老。藩主浅野長矩が江戸城内で吉良義央を切り付け、赤穂藩が領地召し上げとなった後、主家の再興を図りましたが叶えられませんでした。そのため主君の仇討を決意し、元禄15年(1702)12月14日同志47人と共に吉良邸に討ち入り義央の首を討ち取りました。

13. 堀部安兵衛（ほりべ やすべえ） 1670～1703（寛文10年～元禄16年）

赤穂四十七士の1人。新発田藩家臣中山氏の子。舅菅野六左衛門が高田馬場で決闘したのを助け、その腕を見込まれて赤穂藩士堀部弥兵衛の養子になりました。大石良雄ら同士と共に吉良義央邸への討入りを計画し、江戸の取りまとめ役を務めました。

14. 忠臣蔵

赤穂四十七士の仇討を脚色した浄瑠璃の代表作『仮名手本忠臣蔵』が寛延元年(1748)8月に初演され、同年12月には歌舞伎化されて現在まで反復上演されています。作品が上演の度に大当たりを得て評判となってからは、赤穂四十七士の赤穂事件を「忠臣蔵」と呼ぶことが多くなったといえます。

15. 井原西鶴（いはら さいかく） 1642～1693（寛永19年～元禄6年）

江戸前期の俳諧師・浮世草子作家。大坂の富裕な商家に生まれ、15歳頃から俳諧を修め、家業は手代に任せて諸国を遊歴しました。天和2年(1682)浮世草子「好色一代男」を発表し、俳諧師と共に草子作家としても地位を確立しました。作品は「好色五人女」「好色一代女」「武家伝来記」「日本永代蔵」などが有名です。

16. 新井白石（あらい はくせき） 1657～1725（明暦3年～享保10年）

江戸中期の儒学者、政治家。久留里藩の家臣新井氏の子。学問に精進し木下順庵に学びました。のち甲府の徳川綱豊（家宣）の儒臣となり、家宣が6代将軍になると側用人間部詮房と共に幕政を補佐しました。家宣の死後は詮房と共に7代将軍家継を補佐しました。

17. 徳川吉宗（とくがわ よしむね） 1684～1751（貞享元年～宝暦元年）

江戸幕府8代将軍。将軍在職期間は享保元年(1716)～延享2年(1745)です。享保改革を行い幕府中興の英主と呼ばれました。

18. 天一坊（てんいちぼう）

大岡忠相の名裁判を称えた「大岡政談」の1編に登場する人物。享保13年(1728)品川に住む天一坊改行という山伏が徳川吉宗の落胤を称して浪人を集めました。関東郡代伊奈半左衛門に探知され、召し出されて詐欺が発覚したため翌年処刑されたといわれます。この事件が「大岡政談」に掲載されたのです。

19. 絵島（えじま） 1681～1741（天和元年～寛保元年）

江戸中期の江戸城の女中。7代将軍家継の生母月光院に仕えて信頼され、表年寄として勢力がありました。正徳4年(1714)1月江戸山村座の芝居を見物したことから、役者の生島新五郎と親しくなり、同年3月密通の罪が下り高遠藩内藤駿河守の領地に流刑になりました。

20. 近松門左衛門（ちかまつ もんざえもん） 1653～1724（承応2年～享保9年）

江戸中期の歌舞伎狂言・浄瑠璃作者。京都で育ち20歳頃から作者生活に入り、30歳頃から名声が高まりました。竹本座の竹本義太夫と提携して作品を次々に発表する一方、歌舞伎の名優坂田藤十郎のためにも脚本を書き、元禄歌舞伎の全盛時代を築き上げました。

21. 田沼意次（たぬま おきつぐ） 1719～1788（享保4年～天明8年）

享保19年(1734)8代将軍徳川吉宗の世嗣家重の小姓となり、翌年(1735)父の遺跡600石を継ぎます。その後昇進と加増を重ね安永元年(1772)に老中となり、最終的に5万7千石の大名になりました。その政治は功利的な殖産興業政策を推進し田沼時代を現出しました。一方商人との結託による賄賂政治が横行しています。

22. 平賀源内（ひらが げんない） 1728～1779（享保13年～安永8年）

江戸中・後期の本草学者、戯作者。高松藩足軽白石良房の3男。宝暦2年(1752)藩命で長崎に留学し医学・蘭学を学びました。同4年(1754)家督を妹婿に譲って江戸に出て、同10年(1760)頃には本草学者として名声を得ました。寒暖計・鋌山開発・油絵など各分野で才能を発揮しましたが、世に迎えられぬ生活を送り、人を殺傷し牢獄で病死しました。

23. 喜多川歌麿（きたがわ うたまる） 1753～1806（宝暦3年～文化3年）

江戸後期の浮世絵師。天明4年(1784)下谷池端忍ヶ岡に寄寓していた時、版元蔦屋重三郎に見いだされました。寛政3年(1791)全く新しい美人大首絵を発表し、世間の注目を浴びました。

歌麿の人気はその版下絵を求めた出版元が 40 軒を超える程でしたが、蔦屋が亡くなってからは画品も落ちたといえます。

24. 上杉鷹山（うえすぎ ようざん） 1751～1822（宝暦元年～文政5年）

米沢藩主上杉重定の養嗣子。高鍋藩主秋月種美の次男。名は治憲。明和8年(1767)米沢藩襲封。財政危機と宝暦の大飢饉で動揺していた藩政を立て直すため積極的な殖産興業政策を実施しました。とくに製糸・織物の技術を京都・越後から導入し米沢織が有名になりました。藩士に対しては質素儉約・武術を奨励し、また、儒学を再興し興讓館を設立しました。

25. 細川重賢（ほそかわ しげかた） 1720～1785（享保5年～天明5年）

延享4年(1747)熊本藩を襲封。藩財政のひっ迫から藩政改革を断行しました。宝暦5年(1755)藩校時習館を設立し、翌年医学校再春館を設立するなど文武の奨励を行い、藩政刷新に成果をあげました。

26. 松浦静山（まつら せいざん） 1760～1841（宝暦10年～天保12年）

江戸後期の大名。安永4年(1775)平戸藩主を嗣ぎました。藩校維新館を設立して自らも学を講じ、学問・武芸の普及を図りました。その蔵書は3万3千冊といわれます。文政4年(1821)の退隠後「甲子夜話」正・続各100巻、第3編78巻を著しました。

27. 伊能忠敬（いのう ただたか） 1745～1818（延享2年～文政元年）

江戸後期の測量家。上総国武射郡小関村の神保貞恒の3子として誕生。18歳の時佐原の名門伊能家に入り、のち名主となり村政に力を尽くしました。寛政6年(1794)隠居して江戸に出て西洋天文学を学びました。次いで地図製作を志し、高橋至時の推薦で寛政12年(1800)蝦夷の南部の測量を行い、以後17年間測量に従事して文化13年(1816)全国の沿岸測量を完了しました。なお、地図の編さんは文政4年(1821)に完成し幕府に上呈しました。

28. 間宮林蔵（まみや りんぞう） 1775(1780とも)～1844（安永4年～弘化元年）

江戸後期の探検家。常陸国筑波郡谷井田村に籬(たが)屋職人の子として誕生。幼い時から数学的才能に秀でていました。寛政2年(1790)頃江戸に出て寛政11年(1799)幕府に仕え、はじめて蝦夷地に渡りました。翌年蝦夷地御用掛になり西蝦夷地の地形を明らかにしました。文化5年(1808)には樺太探検に赴き、樺太が島であることを明らかにしました。

29. 滝沢馬琴（たきざわ ばきん） 1767～1848（明和4年～嘉永元年）

江戸後期の戯作者。はじめ何家かの大家に仕えましたが、傲慢で不遜なため短期で勤めを辞しました。寛政元年(1789)頃亀田鵬斎に入門し、石川五老から狂歌を学びました。文化3年(1806)頃から読本を多く発行し「椿説弓張月」「南総里見八犬伝」などを次々と発表しました。晩年も失明の患いにも負けず旺盛な創作活動を続けました。

30. 小林一茶（こばやし いっさ） 1763～1827（宝暦13年～文政10年）

江戸後期の俳人。信濃国上水内郡の生まれ。安永6年(1777)の時江戸に出て二六庵竹阿から俳諧を学びました。寛政2年(1790)で二六庵を継ぎ、のち西日本に俳諧修行の旅に出ました。江戸に帰ってから房総地方を遊歴しました。その後13年に渡る異母弟と遺産争いがあり、妻を迎えてやや落ち着いたのは52歳の時でした。

31. 大黒屋光太夫（だいこくや こうだゆう） 1751～1828（宝暦元年～文政11年）

江戸後期の船頭、漂流民。伊勢国若松村の生まれ。光太夫を船頭とする神昌丸は天明2年(1782)白子浦から紀州藩米を積んで江戸に向かい、台風に遭い翌年アリューシャン列島のアム

チトカ島に漂着しました。その後首都ペテルブルグでエカテリーナ 2 世に謁見しています。のちアダム＝ラクスマンに伴われて寛政 4 年(1792)に根室へ帰着しました。

32. 高田屋嘉兵衛 (たかだや かへい) 1769～1827 (明和 6 年～文政 10 年)

江戸後期の海運業者。淡路国に生まれ兵庫に出て回漕業に携わり、寛政 7 年(1795)1700 石積の辰悦丸を建造後に事業が拡大しました。主に蝦夷交易を行い、寛政 11 年(1799)には択捉島との航路を開き漁場を設置しました。文化 3 年(1806)蝦夷地産物売捌方になり、文化 9 年(1812)国後島の沖合でロシア船に捕えられ、カムチャッカに連行後やがて釈放されました。

33. 杉田玄白 (すぎた げんぱく) 1733～1817 (享保 18 年～文化 14 年)

江戸中・後期の蘭方医。小浜藩外科医杉田甫仙の子。蘭方外科を幕府医官西玄哲に学びました。明和 8 年(1771)江戸千住小塚原で前野良沢らと女性の腑分けを見分し、「ターヘル・アナトミア」の翻訳を始めました。4 年間の苦心のすえ安永 3 年(1774)「解体新書」5 巻として刊行しました。

34. 華岡青洲 (はなおか せいしゅう) 1760～1835 (宝暦 10 年～天保 6 年)

江戸後期の外科医。紀伊に生まれ、天明 2 年(1782)京都に行き古医方と西洋流外科を修めました。天明 5 年(1785)紀伊で医業を開きました。「内外合一・活物窮理」を信条に 20 年の苦心の末「麻沸湯」という麻酔薬を考案し、文化 2 年(1805)にはそれを用いて乳がんの手術を行いました。全国各地からやって来る患者を診察し、また門弟を養成しました。

35. 二宮尊徳 (にのみや そんとく) 1787～1856 (天明 7 年～安政 3 年)

江戸後期の農政家。相模国足柄上郡の生まれ。実家は貧農でしたが荒地を開拓し田畑を集め郡内一の地主になりました。小田原藩家老服部家の家政改革、藩主家分家の知行地の立て直しを始め、豊富な農業知識を基に関東各地の自力更生に務めました。

36. 高野長英 (たかの ちょうえい) 1804～1850 (文化元年～嘉永 3 年)

江戸後期の蘭学者。陸奥国水沢藩の医家に育ち、蘭学を杉田玄白門下の養父に学びました。文政 3 年(1820)江戸に出て杉田伯元につき、文政 8 年(1825)長崎に遊学しシーボルトの鳴滝塾で蘭学・医学を学びました。天保元年(1830)江戸に医院を開きましたが、天保 9 年(1838)幕府の対外政策を批判、翌年蛮社の獄で永牢の処分を受けました。脱獄後、嘉永 3 年(1850)幕吏に襲われ自殺しました。

37. 鳥居耀蔵 (とりい ようぞう) 1815～1874 (文化 12 年～明治 7 年)

林述斎の次男。天保 12 年(1841)南町奉行となり、老中水野忠邦が指導した天保の改革を推進しました。上知令の問題で忠邦から離反したため、弘化元年(1844)忠邦の老中再任後に職を罷免され、翌年罪を得て丸亀藩にお預けとなりました。

38. 遠山景元 [金四郎] (とおやま かげもと) ?～1855 (?～安政 2 年)

江戸後期の町奉行。若い頃放蕩して酒を好み娼家に入出入しましたが、のち改心して家督を相続し目付に抜擢されました。天保 6 年(1835)小普請奉行、天保 11 年(1840)には北町奉行となり、老中水野忠邦の天保改革では、鳥居耀蔵ともに市中取締りにあたりました。しかし、常に対立し天保 14 年(1843)大目付になり、水野・鳥居の罷免後町奉行に再任しています。

39. 天璋院 (てんしょういん) 1836～1883 (天保 7 年～明治 16 年)

江戸幕府 13 代将軍家定の夫人。薩摩藩主島津斉彬の養女。名は篤姫。安政 5 年(1858)家定の死後落飾して天璋院と称しました。一時、14 代将軍家茂に嫁いだ和宮と不和が伝えられ、大

奥の女中も慶喜派と家茂派に分かれて対立したといひます。

40. 和宮〔静寛院宮〕(かずのみや〔せいかんいんのみや〕) 1846～1877 (弘化3年～明治10年)

仁孝天皇の第8皇女。名は和宮親子内親王。落飾して静寛院宮。大老井伊直弼が和宮の関東降嫁を計画し桜田門外の変で中断した後、老中安藤信正・久世広周の政権が交渉を再開し、岩倉具視の建策でやむなく降嫁を受け入れました。文久2年(1862)14代将軍家茂と婚儀の式をあげました。慶応2年(1866)家茂の死後も江戸に留まり、徳川家に尽力しました。

【参考文献】

『国史大辞典』1巻 吉川弘文館 昭和54年

『国史大辞典』3巻 吉川弘文館 昭和58年

『コンサイス日本人名事典』三省堂 平成16年7月

